

## フィールディング劇管見その2 —Don Quixote in England: A ComedyからThe Coffee-House Politicianへ—

能 口 盾 彦

### 序

フィールディング(Henry Fielding)の『コーヒー店の政治家』は当初『強姦騒ぎの顛末』(*Rape upon Rape; or, the Justice Caught in his Own Trap*)と題され、1730年6月23日にヘイマーケットの芝居小屋、「小劇場」(the Little Theatre)で舞台にのぼり、同日に発刊を見た。程なく同劇は新“序幕”(new Prologue)を加えて五幕喜劇の『コーヒー店の政治家』に改題・改編され、同年12月4日にリンカーズ・イン・フィールズ劇場で開演され、脚本は時を経ずして刊行された。一方、1734年4月5日に「小劇場」にて上演を果たした三幕物の喜歌劇『イングランドに現れたドン・キホーテ』は、フィールディングが1728年春から翌年の夏にかけてライデン(Leiden)大学に留学した折に着想が湧いたものとされる。予てから傾注していたセルバンテスの『ドン・キホーテ』をイングランドの地に置き換える構想を温めたのだが、同劇の“序文”(Preface)に記されている様に、オランダで脱稿するには至らなかった。<sup>1</sup> 1729年夏に帰国した直後に<sup>したた</sup>認めた『イングランドに現れたドン・キホーテ』をフィールディングはドリユアリー・レイン座に持ち込んだ。老舗の劇場と22歳の青年との繋がり、彼の処女戯曲『恋の種々相』(*Love in Several Masques*)が短期間とは云え、1728年2月に日の目を見たのが同劇場であった故と推定される。劇作家として再スタートを切ったフィールディングの目論見は、劇場関係者のシバー(Colley Cibber)やウィルクス(Robert Wilks)の前に憂き目を見るに終わった。<sup>2</sup> 『イングランドに現れたドン・キホーテ』にはこの時の逸話が取り上げられ、お蔵入りとなったとの箇所が見受けられる。<sup>3</sup>

原作を没にされたフィールディングは已むなく『法学院の伊達男』(*The Temple Beau*)をシバー等に委ねるも、これまた拒否されてしまう。『恋の種々相』の上演には従姉妹のモンタギュー夫人(Lady Mary Montagu)の力添えが効を奏したが、<sup>4</sup> オランダから帰国後に単身で持ち込んだことから、無名の売文家には縁故関係、強力なパトロンが必要不可欠なことが分かる。<sup>5</sup> こうした事情から、フィールディングはグドマンズ・フィールズ劇場(ギャリック < David Garrick >も端役をこなしたと云われる劇場で1737年の「劇場封鎖令」< the Licensing Act >により閉鎖)の支配人ジファード(Henry Giffard)に『法学院の伊達男』のト書きを持ち込み、1730年1月26日の公演にこぎつけた。駆け出しの劇作家として、上演が叶わなければ見入りも約束されない訳で、青年フィールディングは生活防衛と芸術至上主義の兼ね合いを図らなければならなかった。

フィールディングの劇作家人生の中で、実質的に第二作と考えられる『イングランドに現れたドン・キホーテ』が国外で胎動したことは座視し難い事実と云わざるを得ない。本論はオリジナルに歌を差し挟み、バラッド・オペラ風にて選挙場面が三箇所新たに挿入され、1734年4月18日に刊行された改訂版を定本とする。同劇第一幕第六場で「Air V. *The King's Old Courtier*」として歌われた‘The Roast Beef of Old England’は、フィールディングの詩作中の最高傑作とされ、以後のロンドン演劇界の芝居の幕間で挙って演奏される様になったという。大食漢のサンチョがイングランドのロースト・ビーフに舌鼓を打ち、望郷の念さえ吹き飛んだとの彼の台詞(...to tell you the truth, madam, I am so fond of the English roast beef and strong beer, that I don't intend ever to set my foot in Spain again, if I can help it: give me a slice of roast beef, ...) (25)は諧謔性に富む。加えて英国人の狩猟好きな国民性を髣髴させる第二幕第五場の「Air VIII. *There was a Jovial Beggar; &c.*」の第一行‘The dusky night rides down the sky...’以下はロースト・ビーフ賛歌と共にバラッド・オペラを飾る歌として極めて評価が高い。<sup>6</sup>

フィールディング詩歌の傑作を織り込んだ芝居とはいえ、凡作との評価を免れない『イングランドに現れたドン・キホーテ』に『コーヒー店の政治家』を併せて論及するのも、発端となる強姦事件が1730年2月に発覚し、ニュー

ゲイトに収監されたのは宰相ウォルポール(Robert Walpole)の腹心であり、同年4月にその無頼漢が放免されるに至り、醜聞化した最中の6月に『強姦騒ぎの顛末』が開演され、年末には改題・改編された背景に起因する。一方、『イングランドに現れたドン・キホーテ』は1734年春に初演を迎え、執筆時期をフィールディングがオランダから帰国後の秋とすると、両作品の執筆間隔は半年余と見るのが至当ではないか。執筆期間の近接によってテーマの均質性を説く意は無いが、蛮行の背景並びに腐敗選挙で名をはせた時の宰相を考えれば、二つの劇を無関係として片付けられないのではないか。フィールディングがロンドン演劇界に再デビューを飾る当該作品であるのに加え、同作品が『コーヒー店の政治家』同様、青年期、特に二十歳台前半の彼の政治姿勢を顕著に示す作品と考えられるであろう。本論は執筆時期が近接、或いは重複する両作品を取り上げ、両戯曲への劇作家フィールディングの執筆意図と作品評価につなげたい。

## I

『イングランドに現れたドン・キホーテ』を飾る献呈の辞はチェスターフィールド卿(Philip Dormer Stanhope, Fourth Earl of Chesterfield)に献じられ、その中で“the most favourite offspring of the British Muses”(8)であると同伯爵は賞賛されている。さらに“the cause of liberty”(7)とか“true patriotism”(8)の文言を配し、フィールディングは同卿への讃辞を惜しまない。駆け出しの三文文士同様、フィールディングがパトロンにと願ったチェスターフィールド伯爵ではあったが、1733年4月にタバコやワインに課せられた消費税(the Excise Bill)に反対した責を問われ、ウォルポール内閣の閣僚を辞さざるを得なかった。そうした因縁から反政府紙の『コモン・センス』紙(*Common Sense*)創刊に参画したチェスターフィールド卿は、その創刊号(introductory number, 5 February 1737)の中でフィールディングを“an ingenious Dramatick Author”と高く評価している。1737年6月に施行されてフィールディングの劇作家への道を断つことになった「劇場封鎖令」に対し、貴族院で制定反対の熱弁を同卿が奮ったことでも知られている。これに応じてフィールディングも、『チャンピオン』紙(*The Champion*) (27 November 1739, 29 January 1740) や『真の

偉大さ』(*Of True Greatness*)(7 January 1741)に加え、『真の愛国者』(*The True Patriot*)(5 November 1745)でもチェスターフィールド卿に賛美を呈している。前後するがその圧巻は1742年2月22日に公表された『ジョウゼフ・アンドリュース』(*Joseph Andrews*)の第3巻第1章の“Of this number I could name a Peer no less elevated by Nature than by Fortune, . . . adorned with Greatness, enriched with Knowledge, and embellished with Genius.”<sup>7</sup>に示される一節であろう。二人の蜜月関係も、チェスターフィールド卿が1747年6月のミドルセックスの治安判事任命を巡って、フィールドディングに便宜を図らぬ一方、<sup>8</sup>ウォルポール失脚後に実質の後継首班のパラム(Henry Pelham)支持をフィールドディングが鮮明にしたことから、<sup>9</sup>二人の亀裂は決定的なものとなった。<sup>10</sup>

庇護者と頼む実力者の失権と時の宰相との関係をフィールドディングが如何に受け止めたか。一連の諷刺劇の舌鋒が如実にそれを物語っている。1731年4月にヘイマーケットで当初『ウェールズ・オペラ』(*The Welsh Opera: or The Gray Mare the Better Horse*)と銘打たれ、後に改編・改題されて同年6月に同じくヘイマーケットで上演された『クラブ街オペラ』(*The Grub-Street Opera*)に加えて、1731年3月に上演された『悲劇中の悲劇、親指トム一代記』(*The Tragedy of Tragedies, or the Life and Death of Tom Thumb the Great*)でもウォルポール批判が繰り返された。<sup>11</sup>ところが1732年2月にドリユアリー・レイン劇場の舞台を飾った『今様亭主』(*The Modern Husband*)を同首相に献ずる厚顔さをフィールドディングは持ち合わせていた。スウィフト(Jonathan Swift)も顔負けの変身である。パトロンの厚遇を得たいとの一念から、イートン学寮の先輩である時の権力者との関係修復をフィールドディングは目論んだのだろうが、一切無視されたことから、再び反ウォルポール姿勢を強めていった。<sup>12</sup>そこで『イングランドに現れたドン・キホーテ』の献呈の辞がチェスターフィールド卿宛となるのは当然の帰結と云えよう。起稿された『イングランドに現れたドン・キホーテ』には、選挙を控えたイングランドの地方自治体の有様が描写されているが、当時のイングランド議会選挙の実情は、1716年の「七年議会法」によって下院議員の任期は最長七年とされた事から七年サイクルで実施されたようだ。<sup>13</sup> 1734年1月にハイモア(John Highmore)とウィルクス未亡人から特許権(パテント)を譲り受け、ドリユアリー・レ

インの劇場主となったばかりのフリーウッド(Charles Fleetwood)に台本は許諾された。紆余曲折を経て完成を見た同劇の“序文”(Preface)によれば、ドリュアリー・レイン劇場所属の窮乏した役者達に唆されなかったならば、忘れ去られてしまう筈の原稿に手を加え、世の関心事である国政選挙の場面を挿入するに至ったとある(9)。だが肝心の興行は当時流行の黙劇(パントマイム)の人気の前に、同劇場での公演は叶わず、フィールディングはハイマーケットにある自前の「小劇場」に舞台を移さざるを得なかった。劇作家フィールディングの再デビューを飾る筈の同劇は、四年余の歳月をへて1734年春に漸く上演に至った。<sup>14</sup> その歳月の隔たりは、オランダ渡航以前の処女作『恋の種々相』は別として、帰国後から1737年6月に施行された「劇場封鎖令」で閉ざされた八年弱の劇作家人生を考えると、決して短いとは云えない。その決断は満を持してといった大仰なものではなく、日の目を見ることの無かった『イングランドに現れたドン・キホーテ』への劇作家の愛着、思い入れを示すものではなかったか。

## II

文筆家としてのフィールディングは信条、“人間性に差異なし”(Human nature is every where the same...)(9)の具現化を目指すべく、ドン・キホーテとサンチョ両名をイングランドに登場させたが、騎士的狂気の権化として描かれるドン・キホーテは二番煎じで独創性溢れるとは云い難い。だが彼の言動の根幹にある逆転の発想は真理を突き、普遍的な哲理に満ちている。『イングランドに現れたドン・キホーテ』の醸し出す諧謔性に込められた社会諷刺は、正常と狂気の間隙を貫く鋭さがある。『イングランドに現れたドン・キホーテ』には『ドン・キホーテ』の逸話が巧みに挿入されている。当地はとても貧しくて流通資本が乏しい、と暗に金権選挙を市長バウンサー(Bouncer)は期待する(34)。これに対して金で騎士になれるのか、名誉が金で買われるのか(35)、と作者がドン・キホーテに尋ねさせているが、この件に金権政治横行のイングランドの現状が描出され、ドン・キホーテ一行を選挙運動に遭遇させる展開は巧妙かつ新奇な着眼と云わねばならない。類例を挙げれば、貧民が上流階級の人から5シリングを盗めば監獄行きだが、上流階級の人が千

人も貧民から略奪しても、自宅に居座る(17)とか、第一幕第二場の「Air II. *Tweed side*」の特に最後の二行“While they in their palaces hate,/We in our poor cottage will love.”(18)、では高貴な人達は立派な邸宅で憎み合うが、庶民は粗末な掘っ立て小屋で愛し合う、として愛を賛歌し、この世の矛盾、因果をあぶり出す。イングランド人の生き様をめぐり、医者等は隣人を良くするより悪化させるとして、“Sancho, let them call me mad; I'm not mad enough to court their approbation.”(32)であるとのドン・キホーテの言葉は、“狂気”の定義を問いかけるアイロニーに満ちている。

『イングランドに現れたドン・キホーテ』における選挙との絡みは、劇場関係者の救済策として棚晒し原稿が活用され、選挙に関する場面が追加されたとの記載が在る。“序文”に示される如く、目前の国会議員選挙に異邦人のドン・キホーテを如何に関わらせるかに本作品の妙があろう。選挙制度へのフィールディングの批判的姿勢は、宿賃の支払いを求める亭主グズル(Guzzle)とドン・キホーテとのやり取りに象徴的に示唆される。母国スペインでの大失態同様、即ち原作に同じく、宿屋を城郭と見誤るドン・キホーテは、投宿する貴婦人や彼女の従者達が拘禁されていると誤解し、宿屋の亭主が奪い取った全ての金属皿(plates)を戻せと詰問する。騒ぎを聞きつけた隣人達を前に、宿の亭主は盗人呼ばわりされる気まずさを次のように弁じている。

Hear this, neighbours; I am accused of stealing plates and jewels, when every body knows I have but five dozen of plates, and those I bought and paid for honestly; and as for jewels, the devil of any jewels are there in this house, but two bobs that my wife wears in her ears, which were given her by Sir Thomas Loveland at his last election. (23)

宿屋の女将が受け取った“bobs”とは装身具の耳飾りを指し、ラヴランド卿(Sir Thomas Loveland)の選挙の折に貰ったとする件に、妻をも巻き込む選挙収賄の実態が描出され、イングランドの腐敗選挙の根深い構造が具現されている。

『イングランドに現れたドン・キホーテ』で選挙運動の様態は第一幕第八、

九場での市長を交えて住民達が交わす会話に集約されるのではない。文字通り、“大法螺吹き”のバウンサー市長は同幕第八場で、ドン・キホーテをイングランド議員に擁立する是非について、有権者である“小売商氏”(Mr. Retail)と激論を交わす。選挙人達はラヴランド卿と市長が地域全体を牛耳っている為、スペイン人のドン・キホーテが立候補する余地は皆無(28)、宿泊代も払えぬ文無しドン・キホーテにその資格無しとする。買収資金が飛び交わず、町を潤わせぬ人物には投票出来ないとの有権者の声に(28)、ベドラム(Bedlam)——ロンドンにあった精神病院——出身で無一文とは言え、従者(サンチョ)の話では母国スペインに豊かな地所を有するドン・キホーテは、たとえ異邦人で気がふれていようとも、有資格者に相応しいとする市長の明言に、イングランドの形骸化した選挙制度が揶揄されている。同様に第一幕第九場でも市長は別の市民二人にドン・キホーテの選挙立候補への賛同を促す。ドン・キホーテを選ぶ以外に方策は無いと説く市長の弁に、外国人に国政を委ねざるを得ぬイングランドの政治風土と実相を観客や読者に想起させ、劇作家は賄賂選挙へ苦言を呈しているのではない。

イングランドの旅籠の亭主の請求に対し、騎士が城郭に滞在して宿泊費を支払う必要なしとする浮世離れたドン・キホーテに、誇大妄想癖が見受けられる。その彼が王や王子或いは姫君の名を事ある毎に口にした事から、市民達は彼の王党支持を危惧する(29)。そこには近代社会での王と地方自治体、市民の対立構造が反映されている。スペイン王位継承戦争(1701-13)や老僭王(the Old Pretender, James Francis Edward Stuart)を擁する1715年のジャコバイトの叛乱等の硝煙覚めやらぬ1720年代後半のイングランドの国情を鑑みれば、ドン・キホーテの王党支援の対象が、英国国教会やジョージ一世や同二世のハノウヴァー王朝ではなく、カトリック教会及びフランスやスペイン王室との疑念を招くのは必定であろう。ブルボン王朝のジャコバイト支援——ルイ十四世は1708年のジャコバイト蜂起の際、老僭王に五千名の兵士と艦艇を与えてスコットランド上陸を謀るも、ルイ十五世は1715年にスコットランドのマー伯爵(the Earl of Mar)を首謀する老僭王の叛乱を精神的支援するに止まる——はハノウヴァー王朝に懸念を抱かせるものであった。ドン・キホーテの王女思慕の言葉から、フェリペ二世等のカトリック教を信奉し、信徒達を擁

護する諸王が相次いだスペインを思い起こさせたことは想像に難くない。ジャコバイト支援では1719年のスペイン王室の存在<sup>15</sup>が市民達の不安を呼ぶとの設定は、大陸情報を渴望するイングランドの現況を知る上でも巧妙な設定と云えよう。こうした異国趣味や海外への憧憬の高まりと共に、海外情報を織り込むジャーナルの発行が相次いだのも、十八世紀前半のイングランド社会の時代風潮を反映したものであった。古典を耽読したフィールディングがセルバンテスの作風に魅せられたのはその諧謔精神にあらうし、『イングランドに現れたドン・キホーテ』のラ・マンチャの男を迎えるイングランドでの政治土壌でのギャップが爆笑を誘う。国外事情が反映されるのは、『コーヒー店の政治家』も同様で、第五幕第三場でダブルが朗読するのはオランダからの手紙で、大陸情報は異国趣味の一翼を担っている。

金に窮したドン・キホーテが宿に長逗留するのも、選挙を安く上げようとの魂胆ではないか(29)、と市長が説得に努めるのも滑稽この上無い。洋の東西、選挙に費用が掛かるのは今も昔も変わらないようだ。選挙費用がイングランドの町を潤すとは、選挙に金品が動くことを暗示し、選挙権を売買することで利権が生じるだろう。“懐中選挙区”(pocket borough)や“腐敗選挙区”(rotten borough)の選挙用語が生まれた所以である。実際、イングランド各地の大土地所有者達は選挙人に影響力を行使できる立場にあった為、選挙の票を高値で売買する斡旋行為が可能であった。<sup>16</sup> ドン・キホーテが選挙に金を費やさなかったらとの“小売商氏”の懸念には、政党の名誉の為にも彼に金を使わせよう(30)、両政党が出来る限り金を費やせば、正直者は良心に従って投票するだろうし(30)、己が自身に尽くせば、町に延いては国家に貢献すると市長は力説する(30)。

ではフィクションを離れ、現実のイングランドでの選挙支配をめぐる実情はどうであったのか。各地の大土地所有者が富と権力を手に入れることは珍しいことではなかったが、やはり自然に生じる影響力が選挙結果を決定し、ロンドンの金融・商業の中心地シティの実業家が何の縁も無い選挙区にギニー金貨(21シリング)をばら撒いても反発・非難を浴びて議席を獲得出来なかったと云う。<sup>17</sup> それだけイングランドの選挙民の意識、良心の劣化は進むことは無かったようである。選挙史上、都市や地方の政治を担う選挙民

たる自由土地保有者の生業は農業が主であった。だが次第に商工業者の台頭は目覚しくなり、州選挙区の財産資格は従来から地租を含めた年40シリング以上の自由土地保有が原則であったが、16世紀から17世紀にかけての物価上昇の影響で、年収2ポンドという下限は一層低下した。その結果、17世紀から18世紀にかけて有権者数は飛躍的に増加したらしい。例えばノーフォーク州では1690年の選挙で四千人が、1710年の選挙では六千人が選挙権を行使したとか。<sup>18</sup>

史実と虚構の世界を混同してはならないが、『イングランドに現れたドン・キホーテ』第一幕第八、九場に繰り広げられる市長と市民達の遣り取りから、イングランドの選挙形態とその弊害、欠陥が浮き彫りにされる。同国の政治を担う政党間の差異は陳述されていないが、同劇第二幕第四場で宿の亭主が郷士バジャー (Badger) に投宿人のサンチョの名を挙げると、サンチョはホイッグカトーリーかと郷士が尋ねている件から(36)、選挙制度と党派争いが表裏一体と判明する。こうしてイングランドの腐敗選挙の実態が暗示される一方、バジャーが横恋慕するラヴランド卿の娘ドロシニア (Dorothea) とフェアラブ (Fairlove) とが愛を成就させる、陳腐な筋書きが供される。作品の比重が奇行奇癖なラ・マンチャの男の挙動に置かれていることは一目瞭然、異国の地にあっても愛しのドゥルシネア姫 (Dulcinea) を思慕・探求し、当地の貴族、郷士や市長、さらには宿屋の亭主夫妻等と珍問愚答を繰り返す。もっとも、『イングランドに現れたドン・キホーテ』のこの渾然一体とした作品構成に、読者や観客の興味が募られるのではないか。

セルバンテス (Miguel de Cervantes) の英国での人気や影響力が並外れていることは、英語版『ドン・キホーテ』の刊行の迅速さに象徴される。1612年にシェルトン (Thomas Shelton) による『ドン・キホーテ』全訳が結実を見た事から、フィールディングも翻訳本で読んだようだ。<sup>19</sup> セルバンテス及び彼の大著の英国文壇への影響は計り知れず、十八世紀に限ってみても、アディソン (Joseph Addison) やステール (Richard Steele) にスウィフト (Jonathan Swift) やホガース (William Hogarth) 等を驚嘆させたと言っても異論は無いだろう。<sup>20</sup> ドン・キホーテの活躍を前に、フェアラブとドロシニアの恋愛と愛の成就、バジャーの横恋慕は添物と化す。ラ・マンチャの男にイングランド

の地を踏ませる発想がフィールディングの独創とは決め難いが、ドン・キホーテを中核に据えて第二作執筆に臨んだ事、加えて『ジョウゼフ・アンドリュース』のタイトルに“The History of the Adventures of Joseph Andrews, . . . Written in Imitation of the Manner of Cervantes, Author of *Don Quixote*”の語句が見られる事から分かる様に、フィールディングのスペイン作家への評価は高い。異邦人のドン・キホーテ一行が選挙を控えたイングランドで珍道中を繰り広げることに、『イングランドに現れたドン・キホーテ』の意義が在り、選挙の虚構と実態の遊離を暴こうとするイングランド劇作家の意趣が込められている。

### Ⅲ

『イングランドに現れたドン・キホーテ』の中で異邦人をイングランドの選挙制度の週上に載せる着想は、奇抜であると同時にフィールディングの選挙を媒介とする関心の高さを物語るのではないか。その意味から『コーヒー店の政治家』も無視し難い。ロンドン演劇界の新進脚本家の政治諷刺は『親指トム』等のこの時期の一連のウォルポール諷刺劇の中でも、選挙制度に特化していることで二作品は共通している。五幕喜劇の同劇は、先ず『強姦騒ぎの顛末』と題され、後に新“序幕”を添えて『コーヒー店の政治家』と改題され、1730年末に今日ある劇作となった。『強姦騒ぎの顛末』はウォルポール首相批判が込められた『親指トム一代記』(*The Life and Death of Tom Thumb the Great, A Tragedy*)に遅れること二ヶ月、1730年6月23日に「小劇場」で開演され、日を置かず発刊された。当初の刺激的なタイトルはポープ(Alexander Pope)の『髪が強奪』(*The Rape of the Lock*)のコピーかと見まがうばかりだが、「チャータリス強姦裁判」(the Charteris Rape Trial)がその契機と推断される。チャータリス大佐(Colonel Francis Charteris)とはトランプ詐欺や盗みに手を染めた名うての悪漢だが、宰相ウォルポールの政治諜報員としてよく知られた人物である。その彼が1730年2月に自邸のお手伝いを手に掛けた咎で、終身刑の罪でニューゲイトに収監された。ところが同年4月には早くも放免された事から、一般市民も含む激しい論議が巻き起こった。赦免処置に現役首相の影がちらついた事から、フィールディングの感興を呼んだこ

とは想像に難くないが、裁判沙汰や事件の顛末への詳細は、紙面の関係上他紙に譲りたい。<sup>21</sup> 当時の芝居通でなくとも、その衝撃的なタイトルから極めて時事的と捉えることは可能だが、前述の背景をタイトルから想像することは容易でない。改題のプロセスから推測出来るように、観客の期待と刺激的なタイトルとの齟齬を感じるのは論者のみではないだろう。執筆意図がレイブ事件の解明と容疑者の弾劾にあるのか、それともコーヒー店での政治四方山話に重点が置かれているのか、判断が分かれるところで、それが作品評価の低い所以ではなかろうか。

暴漢の出現に恋人と離れ離れとなった乙女ヒラレット(Hilaret)は、救出に出向くランブル(Ramble)を強奪者と誤解する事から冤罪事件が生じる。当の暴漢が混乱に紛れて逃走したことから、犯人として捕らえられたランブルを巡る強姦未遂事件と刑事訴追が時を追って展開する。失神したヒロインの記憶が曖昧なことに加えて、事件の揉み消しをはかる袖の下に窮した結果、ランブルはやむなく司直の手に掛かる。事件を扱う判事は“搾取する”を連想させるスキーズム(Squeezum)だが、ヒラレットを尋問するうちに彼女に邪な心を抱く。ここに深夜の捕り物劇は多面的広がりを見せる。裁判の過程に通じるスキーズム夫人は縄目を受けたインド帰りの青年ランブルに一目惚れ(II, viii-x)。ランブルが収監先で出会うのが同様の罪で拘禁された東インド会社の元同僚コンスタンツ(Constant)といった按配で、例によって偶発事件が連続する(IV, iii)。二人が冤罪を晴らす過程で、父のポリティック(Politick)に勘当されて東インド会社で禄を食むようになったランブルであったが、裁判の最中に父と再会・和解する(V, xi: the Last)。ワージー(Worthy)の妹イザベラ(Isabella)がランブルの妻と判明する一方、ポリティックの娘ヒラレットとランブルは兄妹と確認される事から、夜陰の強姦未遂事件は近親相姦を臆測させる。コンスタンツの嫌疑は漸く晴れて、騒ぎで別れ離れとなった恋人ヒラレットと再会を果たす。事件の顛末は強姦未遂事件を取り扱うスキーズム判事が、調書作成中に淫らな気持ちに駆られた結果、ヒラレットに強姦罪で訴えられる始末(IV, vi-vii)。スキーズムの妻と知ってランブルは彼女と逢瀬を重ねることを予想させる一方(II, xi)、スキーズムは妻を訝る(IV, i)。二人の青年を巻き込む冤罪事件が内包する悲劇性を、スキーズム夫妻が絡む喜劇で

解消させる便法に、フィールディングの諧謔精神が発揮され、『強姦騒ぎの顛末』の副題、「罫に掛かった判事」の意が判明する。

表題から窺える強姦・冤罪事件は判事スキーザムを巻き込む法曹界不信へと展開される。改題されたタイトルでは、政治及び法曹界の腐敗に言及は見られても、不具合な感を免れない。金銭欲の権化が欲望を抱いた挙句、不祥事の揉消しを意図して、ヒラレットに示談金を持ちかける始末に、当代の裁判官の資質が問われている。原告に不埒な気持ちを抱く裁判官、その裁判官である夫の鼻を出し抜く妻、その妻と知って寝取ろうと目論む被告、その被告を捕らえる金まみれの官憲、こうした負の連鎖反応から政治不信、法曹界批判が醸成されていく。一方、コーヒー店に屯するのはポリティックやダブル(Dabble)にソトモア(Sotmore)、フェイスフル(Faithful)達の政治がらみの名を持つ端役達である。『コーヒー店の政治家』第五幕第三場でオランダから届いた手紙をダブルが朗読する場面に象徴される如く、情報交換の場としてのコーヒー店がある。ワージの独白“The Covetous, the Prodigal, the Superstitious, the Libertine, and the Coffee-house Politician, are all *Quixottes* in their several Ways.”<sup>22</sup>は、コーヒー店に群れ集う軽薄な政治屋達が空理空論に身をやつす輩と、誇大妄想にとり付かれたドン・キホーテとは同じ穴の貉、そんな彼等をイングランドの選挙に参画させる設定に、フィールディングが認識するイングランドの選挙実態、腐敗選挙との交差点が窺えるのではなからうか。

#### IV

牛島が芭蕉やフーテンの寅さんとドン・キホーテを比較し、「芭蕉を風狂と呼ぶとするなら、ドン・キホーテはいわば騎士道に狂った道狂の人であり」と論述しているが、云い得て妙である。<sup>23</sup> ドゥルシネア姫への愛に象徴される騎士道理念に取り付かれたラ・マンチャの郷土アロンソ・キハーノが騎士物語を読み耽ってドン・キホーテと化す。夢と現実の区分が付かなくなったドン・キホーテは痩せ馬ロシナンテ、徒歩が苦手な小太りサンチョは灰毛の驢馬に跨って故郷のモンティエール平原の村から、トポーソ村に住むやんごとなきドゥルシネア姫に見えんと馬上の人となる。ドン・キホーテ

一行は行く先々で大騒動を引き起こす。主人公の狂信さから旅籠を城郭と思いつくことから、宿賃を請求されても支払わぬ為、宿泊先で大立ち回りを演じる羽目となる。原作に在る逸話をフィールディングは『イングランドに現れたドン・キホーテ』の宿の亭主を巻き込む選挙の局面と対応させている。

名高い冒険話に絞ってみよう。『ドン・キホーテ』第一篇第八章で唯の風車だとサンチョがいくら諫めても、三、四十人も巨人と思い込んだドン・キホーテは、勇猛果敢に立ち向かうが、風車の大きな翼に引っ掛けられて大空に舞い上げられ、ロシナンテ共々大地に叩きつけられる。<sup>24</sup> 風車にはね飛ばされた翌日、聖ベニート修道僧一行に遭遇するドン・キホーテは、高貴な上臍を拉致する無法者の族と勘違いし、貴婦人警護のビスカヤ人と太刀合せの末に左の耳朶を半分切り取られる傷を負う。第三篇第十八章では羊や山羊の群れが巻き起こす前途の砂塵を、ドン・キホーテは空想の赴くまま、トラポバーナの君主とガラマンタ族の王率いる軍勢の交戦に因るものと考え、数に劣るガラマンタに加勢するとして臨戦態勢に入る。唯の羊に過ぎないとサンチョの声も空しく、群れの中に突入しては羊を次々と槍に掛ける。彼のこの乱暴狼藉に羊飼いや達もすぐに反撃に転じ、彼らの飛び道具に重症を負ったドン・キホーテ救出にサンチョは急行する。さらに『ドン・キホーテ』第三篇第二十章では、漆黒の闇夜に響く水車に肝を潰すドン・キホーテ主従である。夜陰の地響きや水音に金属の擦れ合う音が反響することで一層恐怖心に駆られたサンチョは、正体を見極めようと逸るドン・キホーテの愛馬ロシナンテの膝を括り付け、一人取り残されるのを防ぐ。主人の挙動に動転するが機転を利かすサンチョの真髓がここにある。

前後三回にわたってスペイン東部（ラ・マンチャ、アラゴン、カタルーニャ）をドン・キホーテは旅するのだが、僅か三日間で終わる単独行の第一回の旅は第五章までで、遭遇した隣人の農夫ペドロ・アロンソによってドン・キホーテは一旦連れ戻される。第七章から「前篇」の最後まで約二ヶ月間が第二回目の旅で、ドン・キホーテと同行するのがサンチョという近在の農夫である。この従者が如何に重要であるかは、サンチョの導入をもって本来の小説としての形態を成すとの意見が在ることからも分かるだろう。<sup>25</sup> 大方の予想に反して、ドン・キホーテ一行が織り成す冒険話が全篇に占める割合はご

く僅かで、前述の有名な逸話のどれも、例えばドン・キホーテによる風車への猪突猛進はほんの数頁を占めるに過ぎない。<sup>26</sup> 『イングランドに現れたドン・キホーテ』で風車に突撃する同様の逸話が挿入されないのも、ドン・キホーテの常軌を逸した行動に駆り立てる風車がイングランドに皆無でないにしても、敢えてこの逸話をイングランドの舞台に登用する愚をフィールドイニングは避けたものと推断される。

勿論、採択された逸話が無くては、表題との意味合いからも不具合この上ない。『ドン・キホーテ』で宿屋の支払請求をめぐって一騒動が持ち上がる逸話を下書きに、同類の諍いが『イングランドに現れたドン・キホーテ』にも挿入されている。宿の主人をMy Lord(19)と呼ぶドン・キホーテ一行に、亭主は宿賃を支払わせて直ちに立出させたい。ドロシヤが“enchanted thus…”(6)と歌うと、魔法にかけられたと、ドン・キホーテは宿の壁にぶち当たり、彼女を救い出そうとする(22)。家屋の損害賠償に千ギニーを支払ってやれとサンチョに申し渡すドン・キホーテだが、無い袖振れぬとサンチョは支払いを拒否する(19-20)。宿の主人は支払われぬなら、以後飲み食いはならぬと申し渡せば、サンチョはここ12時間も絶食中だから、毛布で放り投げられても羽毛の如き軽さだと嘯くのも(20)、『ドン・キホーテ』で代金未納のサンチョが無銭飲食の仕置きとして、毛布で放り投げられる逸話を踏襲している(I, xvii)。

狂乱劇以外の本編は概ねサンチョを聞き手とする博学多才なドン・キホーテの雄弁・多弁のオン・パレードと云ってよい。この多弁さは『イングランドに現れたドン・キホーテ』にも生かされ、第二幕第一場の対話の如く、サンチョは聞き手に徹していると云って良い。「後篇」の約四ヶ月に亘る第三回の旅では、前半部で認められた自らの妄想の世界にドン・キホーテが完全に没頭する例は皆無に近い。既刊の『ドン・キホーテ』の「前篇」を読んでドン・キホーテの酔狂さを察知した公爵夫妻は、戯れに本物の騎士らしく遇してはドン・キホーテを愚弄する。それもこれも『ドン・キホーテ』の「前篇」が1605年1月中旬に出版されて好評裏にたちまち六版を数え、満を持してセルバンテスが1615年に『ドン・キホーテ』の後篇を出版した経緯が故である。というのも前年、1614年の秋に匿名作家による贋作が出版されるハブ

ニングが生じた事から、後篇にはセルバンテスの原作者としての気骨が反映されたものと推される。公爵夫妻に限らず、サンチョ自身も主人を謀って田舎娘をドゥルシネア姫と思わせる。この策謀に対して、ドン・キホーテは思い姫が百姓娘に姿を変えてしまったと解釈する等、ドン・キホーテが周囲の人々に欺かれ、彼が如何に反応するかが「後篇」の本筋を成すと定めるべきではないか。ウナムーノはドン・キホーテ主従の関係を論じ、「今日、実証主義、自然主義、経験主義などと呼ばれているサンチョ・パンサ主義はかくのごときものであり、恐怖がすぎざるや否や、ドン・キホーテ的理想主義を嘲笑するといったものなのである」と記している。<sup>27</sup> 騎士道ロマンスに耽溺して現実社会と乖離したドン・キホーテの奇行が引き起こす騒動は数限り無いこと必定、ドン・キホーテ主従の旅は果てしなく続く。もっともドン・キホーテの死で物語が終焉を迎えることは云うまでもない。

ドン・キホーテとサンチョが何故帯同するのか、『イングランドに現れたドン・キホーテ』と関連付けて考えてみる必要がある。田舎の下級貴族、郷土ドン・キホーテは島の太守任命を仄めかして農夫サンチョを従士として鹿島立ちを果たすが、農夫が近未来に領地を所有する設定は、地租の収益を根幹とする理念から、土地保有者に選挙権が付与されるイングランドの選挙制度に対応している。ドン・キホーテのイングランド議員立候補をめぐり、市長と選挙人達はドン・キホーテの被選挙権の資格の有無を巡り、意見の応酬を繰り返す。地方自治体の経済、即ち町が潤わぬ人物には投票出来ないとのイングランド有権者の反応、たとえ異邦人で気がふれていようとも有資格者とする市長の弁に、イングランドの選挙制度の矛盾が露呈する。サンチョを同行させる為に、全く世事を弁えぬ常識外れのドン・キホーテが採択した術は、土地を餌にサンチョの強欲を見越しては空手形を連発する。サンチョの不埒な動機を見据えてたドン・キホーテは、土地に執着する農民心理を見事に突いている。事実、『イングランドに現れたドン・キホーテ』第二幕第十四場のサンチョの台詞、“Well, if ever I do lay my fingers on an island more, I’ll act like other wise governors, fall to plundering as fast as I can; and when I have made my fortune, why, let them turn me out if they will.”(49)は、サンチョの野心を披瀝すると同時に、政治諷刺の色合いが濃く、イングランドの時の与党有

力議員達の錬金術を暗示する。地所に立脚するイングランド選挙事情と絡めたフィールディングの筆致は決して平板でなく、新議会選挙詔書が發布された正にその日に発刊された、<sup>28</sup> 『イングランドに現れたドン・キホーテ』は選挙を見据えたタイムリーな劇作と云えよう。

## V

十八世紀前半の英国演劇界を取り巻く環境は実際どの様な様子を呈していたのか。本論で扱う『イングランドに現れたドン・キホーテ』からも当時の芝居の有様が偲ばれる。“はしがき”(Introduction)に登場するフィールディングと思しき自画自賛の劇作家と、前口上が無い等と、劇の仕上がりを気にかける劇場支配人とが、開演を前に演劇論を戦わす。そこへ役者が飛び込んできて、“Sir, the audience make such a noise with their canes, that if we don't begin immediately, they will beat the house down before the play begins; . . .”(12)、と劇場内ののっぴきならぬ状況を伝えている。芝居が笑劇の類、ファース或いはバーレスクであることから、芝居がかった言い回しが採択されたのは当然とはいえ、何とも物騒な芝居見物ではなかろうか。観劇のマナーは芝居の質と呼応したと見てよい。芝居小屋が打倒される前兆として、野次が飛び交い、喧嘩を始める者など、乱暴狼藉の類がそこかしこに展開され、台詞は喧騒にかき消される始末から、芝居の中身もおよそ見当がつく。舞台が観客をつくる喩えの如く、十八世紀初期のイングランドの名立たる劇場ですら、観客が無頼漢もどきの者で占められた事から、<sup>29</sup> 凡俗かつ陳腐な芸風が幅を利かしていたと推断される。芝居見物が平穩無事に終わることは稀で、劇場関係者の資質もこれに呼応したとしても致し方ない。ロンドン演劇界に再登場を果たしたフィールディングを迎えるのは、低俗の一語に尽きる舞台環境であり、本格的な芝居は影を潜め、野卑な観客の趣向に合わせた笑劇や黙劇に喜歌劇が幅を利かしていた。当代の劇場関係者として、シバーやリッチ(John Rich)等の俗物が演劇界を仕切っていた。モンタギュ夫人の口添えて四晩とは云え、ドリユアリー・レイン劇場にて『恋の種々相』の公演に漕ぎ着けたフィールディングであったが、数年後に持ち込んだ『イングランドに現れたドン・キホーテ』の脚本がシバーやウィルクス等の劇場関係者達によつ

て舞台に不向きとして突き返されるが、その挫折の経験を改訂版の“序文”に俳優救済策との便法として生かす強かさを彼は持ち合わせていた。ロンドン演劇界を牛耳る兩名に対し、フィールディングは『作者の笑劇』(*The Author's Farce*)でも意趣晴らしを目論む。労作を持ち込む劇作家ラックレス(Lackless)が劇場支配人マープレイ親子(Marplay)に難癖を付けられた挙句に上演を拒否されてしまう顛末に、フィールディングは自己投影を計った次第だ。1734年の改訂版に登場するマープレイ親子とはシバー親子に他ならず、1730年の原作では支配人がマープレイとスパークッシュ(Sparkish)という名に改名されているのも、1732年にウィルクスが亡くなった故と考察される。

ロンドン演劇にあつて自作を間断なく上演する為にも、フィールディングは観客の関心、趣向に応えることを第一の旨とした。一年半弱の国外生活を過ごして帰国したフィールディングは、ロンドンを根城に1730年から1737年発布の「劇場封鎖令」まで、劇作品を次々と世に送り出すのであった。ざっと挙げてみても、1730年の『作者の笑劇』や『法学院の伊達男』、1731年には『親指トム一代記』に本論で扱う『コーヒー店の政治家』、さらに『手紙を書く男達』(*The Letter-Writers, or A New Way to Keep a Wife at Home*)や当初は『ウェールズ・オペラ』と銘打たれていた『クラブ街オペラ』、1732年に『今様亭主』や『放蕩老人達』(*The Old Debauchees, or The Jesuit Caught*)に『コヴェント・ガーデンの悲劇』(*The Covent-Garden Tragedy*)を、1733年にはモリエールの翻案劇『けちん坊』(*The Miser*)を世に問うている。1737年6月には劇作家人生を終えるフィールディングの契機は、自身が1737年3月に自前の劇場、「小劇場」で上演した『1736年の歴史的記録』(*The Historical Register for the Year 1736*)が決定的な引き金となり、「劇場封鎖令」を契機として劇作家の筆を折る羽目となった。『ウェールズ・オペラ』では『悲劇中の悲劇、親指トム一代記』の親指トムとして皮肉ったウォルポール首相と、<sup>30</sup> ジョージ二世の王妃キャロラインが昵懇であると揶揄したことで、上演禁止の処置も受けた。そこで改作されたのが『クラブ街オペラ』なのだが、フィールディング存命中に同芝居が舞台に掛かることは無かった。<sup>31</sup> バーレスクと称される笑劇を旨とすることから、当世社会諷刺を全般的な芸風とするのが、フィールディング劇の特徴といえよう。

## 結語

『イングランドに現れたドン・キホーテ』はその作風や改作に至る経緯から、フィールディングの初期作品中では異色の作品と云えるであろう。同作品が起稿され上演されるまでに四年半余りの歳月が流れていることを考えると、笑劇を中心とした二十五篇余の劇作を僅か実質七年余でものした劇作家人生にとって、極めて長いとの印象は否めず、速筆を旨とするフィールディングの間尺に合わない。諸般の事情から上演を果たせないまま、棚晒しとなった自作への想いや執着を、劇作家として再スタートを切ったフィールディングが抱いたとしても不思議ではない。日の目を見なかった芝居原稿が窮乏した役者に促されて云々は、ロンドン演劇界を席卷する無能な演劇関係者への痛烈な皮肉が込められている。芝居を解せぬ演劇界の大ボス達への反発は、フィールディングの反骨精神とは無縁ではないだろう。十八世紀前半の文人達が競ってパトロンの庇護を求め、自作に王侯貴族や政界の実力者への献呈の辞を添えたのも、売文家の自活への道程と見なされるであろう。その過程に示唆される如く、1730年代前半に1735年以後とは異なったフィールディングの政治諷刺劇が次々と舞台上に上った。前稿で論及した『親指トム一代記』等もほぼ同時期の作品だが、『コーヒー店の政治家』が描出するレイブ冤罪事件に、法曹界を巻き込んだイングランドの政治風土が描出されている。『強姦騒ぎの顛末』はヘイマーケット劇場で開演され、12月4日に刊行されている。一方、『イングランドに現れたドン・キホーテ』は1734年4月5日に初演を迎えて直ちに発刊され、両作品の執筆間隔は半年未滿と見るのが妥当であろう。発表年次で後塵を拝するも『イングランドに現れたドン・キホーテ』はその着眼点から鑑みて、処女作『恋の種々相』に次ぐフィールディング第二の劇作と解釈してよいだろう。騎士道精神旺盛なドン・キホーテを、イングランドの選挙に参画させようとする着想は独創性の名に相応しい。腐敗選挙区の候補者として誇大妄想に取り付かれた異邦人を選出する奇想さに、フィールディングの意趣と才知が込められている。

『コーヒー店の政治家』と『イングランドに現れたドン・キホーテ』の接点として、五幕と三幕の差異はあるが何れも旧来の本格的喜劇を目指し、<sup>32</sup>

国家や地方自治を席巻する選挙制度や法曹制度に焦点を見据えた点に共通項が窺える。『コーヒー店の政治家』でコーヒー店に集うのは、主人公役を演じる若者達ではなく政治家ならぬ政治屋達である。端役のポリテックやダブルにソトモア、フェイスフル達の自称政治家の中年男が屯する。彼らが如何に政治談議に花咲かせようとも、所詮は私利私欲に目がくらんだ烏合の衆に過ぎない。同劇第五幕第三場でダブルが海外情報を朗読する件に象徴される如く、大仰に情報交換に事寄せて集う無能者とフィールディングは捉え、無知蒙昧な族の集会場としてのコーヒー店の役割がある。一方、熟年裁判官夫妻とランブルやヒラレットを中心とした恋愛劇が強姦未遂事件の解明と同時進展する。裁判官スキーザムの偽善や独善性、同夫人の好色さ等が暴露されると同時に、コーヒー店で繰り返される国家や自治を標榜する論議の浅薄さが揶揄されている。恋愛と政としての政治が夜陰と集会場で繰り上げられるのが、『コーヒー店の政治家』の描出する世界と云えるのではないか。当然、当時のイングランドの国会議員選挙で選挙権及び被選挙権の資格は年収の証としての土地所有の有無であった事から、誇大妄想に取り付かれる異邦人、ドン・キホーテをイングランドの選挙に参画させる着想に、作者が認識するイングランド選挙制度から浮かび上がる、腐敗構造、金権政治と衆愚政治の実態が両作品の接点として指摘できるであろう。

## 註

- 1 Martin Battestin with Ruthe Battestin, *Henry Fielding: A Life* (London: Routledge, 1989), 76; Homes Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times* (Oxford: Clarendon Press, 1952), 1: 26; Donald Thomas, *Henry Fielding* (New York: St. Martin's Press, 1990), 52-3; Albert Rivero, *The Plays of Henry Fielding: A Critical Study of His Dramatic Career* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1989), 126.
- 2 Battestin, *Henry Fielding: A Life*, 77; Dudden, *Henry Fielding*, 1: 45.
- 3 Henry Fielding, *Don Quixote in England, A Comedy*, *The Complete Works of Henry Fielding*, Ed. William Henley (New York: Barnes & Noble, Inc., 1967), 11: 9、以後の引用は全て同版により文中に記す。
- 4 『恋の種々相』は、モンタギュ夫人の斡旋を得たこともあって、ドリユアリー・

レイン劇場で1728年2月16日からシバー (Colley Cibber)やウィルクス(Robert Wilks)の男優人に加え、名女優アン・オールドフィールド夫人(Mrs. Anne Oldfield)等の共演を得て上演されたが、四晩で打ち切られた。華々しくロンドン演劇界に気鋭の劇作家としてデビューを果たしたフィールドディングではあったが、当時競合する劇作品が災いしたのは否めない。直前の出し物として挙げられる戯曲として、バンブラ(Sir John Vanbrugh)原作の未完の『ロンドンへの旅』(*Journey to London*)をシバーが改題・改編した『夫の憤慨』(*The Provok'd Husband*)が28晩の興行が打たれ、折しもリンカーンズ・イン・フィールズ座ではゲイの『乞食オペラ』(*The Beggar's Opera*)も興行中であった。『恋の種々相』の初演を果たすも、劇作家としての未熟さを感じたのか、フィールドディングは翌月半ばにはオランダに旅立つ。

Cf., Dudden, *Henry Fielding*, 22-5.

- 5 このダデン説に対し、クロスやヒュームはフィールドディングの劇作収入は一年で少なくとも三百ポンドは下らず、窮乏生活故のパトロン待望説は当たらずとする。Cf., Dudden, *Henry Fielding*, 1: 133. Wilbur Cross, *The History of Henry Fielding* (New York: Russell & Russell Inc., 1963), 1: 157 & 160; Robert Hume, *Henry Fielding and the London Theatre 1728-1737* (Oxford: Clarendon Press, 1988), 184-5.
- 6 Batestin, *Henry Fielding: A Life*, 114; Cross, *The History of Henry Fielding*, 1: 109; G. M. Godden, *Henry Fielding: A Memoir* (London: Sampson Low, Marston & Co. Ltd., 1910), 42.
- 7 Henry Fielding, *Joseph Andrews*, Ed. Martin Batestin, "The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding" (Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1967), 190.
- 8 Batestin, *Henry Fielding: A Life*, 418.
- 9 拙稿、「フィールドディングとペラム内閣との関わり」『十八世紀イギリス文学研究——躍動する言語表象——』日本ジョンソン協会編第3号(東京:開拓社、2006)、217-22頁。
- 10 Batestin, *Henry Fielding: A Life*, 426; Dudden, *Henry Fielding*, 1: 133-4.
- 11 拙稿、「フィールドディング劇管見そのI——『親指トム一代記』から『悲劇中の悲劇、親指トム一代記』へ——」『言語文化』第10巻第1号(同志社大学言語文化学会、2007)、62-3頁。
- 12 拙稿、「フィールドディングの離反と回帰——ウォルポールをめぐる——」『言語文化』第8巻第4号(同志社大学言語文化学会、2006)、727-30頁。
- 13 ウィリアム三世の治世下(1689-1702)では平均して二年余に一度選挙が実施されたい。ジョージ二世の治世下(1727-60)では七年に一度程度と長期化したのも、金権政治の故であろう。

参照:水谷三公、『英国貴族と文化』(東京:東京大学出版、1987年)、193頁;  
 ジョルジュ・ミノア著、手塚リリ子他訳『ジョージ王時代のイギリス』(東京:

白水社、2000年)、19頁。

Battestin, *Henry Fielding: A Life*, 174.

14 Dudden, *Henry Fielding*, 1: 126.

ステイーヴン編纂のフィールディング全集では、1733年にハイマーケットの「ニュー・シアター」で初演されたとする。

Cf., Henry Fielding, *Don Quixote in England*, *The Complete Works of Henry Fielding*, Ed. Leslie Stephen (London: Smith, Elder, & Co., 1882), 9: 433.

15 Frank McLynn, *Charles Edward Stuart* (Oxford: Oxford University Press, 1991), 4.

16 ミノワ著、『ジョージ王時代のイギリス』、14-5頁；青木康、「選挙区・議会・政府、」近藤和彦編、『長い18世紀のイギリス その政治社会』（東京：山川出版社、2002年）、103頁。

17 W. A. Speck, *A Concise History of Britain* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), 8.

18 松浦高嶺『イギリス近代史論集』（東京：山川出版社、2005年）、67-8頁。

19 Ronald Paulson, *Don Quixote in England: The Aesthetics of Laughter* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1998), xix.

20 Paulson, *Don Quixote in England*, 8-31, 39-65.

21 Bertrand Goldgar, *Walpole and the Wits: The Relation of Politics to Literature, 1722-1742* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1976), 105-10.

22 Henry Fielding, “The Coffee-House Politician,” *Plays Volume 1, 1728-1731*, Ed. Thomas Lockwood, “The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding” (Oxford: Clarendon Press, 2004), 458.

23 牛島信明『ドン・キホーテの旅』（東京：中央公論新社、2002年）、166、178頁。

24 ドン・キホーテ一行が見たとするモンティエール平野の風車群は、その数の点からもスペインへの風車導入の歴史から考察しても疑わしい。

参照 岩根隼和『贋作ドン・キホーテ』（東京：中央公論社、1997年）、21-5頁。

25 アメリコ・カストロ著 本田訳『セルバンテスとスペイン生粋主義』（東京：法政大学出版局、2006年）、68頁。

26 風車の場面は第一巻第八章の前半部、109-12、挿絵を挟んで実質二頁、同章後半部のビスカヤ人との一騎打は121-23、四頁未滿、第1巻第18章の羊の群れを軍勢と見立てて乱入した顛末は247-48、僅か二頁に過ぎない。

参照 セルバンテス著 会田訳『ドン・キホーテ』（東京：晶文社、1985年）第1巻（全4巻）、全475頁。

27 ミゲル・デ・ウナムーノ著 マタイス、佐々木訳『ドン・キホーテとサンチョの生涯』（東京：法政大学出版局、1972年）、103頁。

28 Cross, *The History of Henry Fielding*, 1: 157-8.

29 John Dennis, *The Original Works of John Dennis*, Ed. Edward Hooker (Baltimore: Johns

Hopkins University Press, 1939-43), 1: 293.

30 拙稿、「フィールディングとヘンデルの接点」『言語文化』第7巻第1号（同志社大学言語文化学会、2004）、73-5頁；拙稿、「フィールディング劇管見その1」、64-5頁。

31 1731年6月11日にヘイマーケットで上演の運びとなるも、時の王室家命によって直前に発禁処置を受けた。

Cf., Batestin, *Henry Fielding: A Life*, 120; Dudden, *Henry Fielding*, 1: 90.

32 Hume, *Henry Fielding*, 257.

## A Study of the Drama of Henry Fielding (Part 2) : From *Don Quixote in England: A Comedy* to *The Coffee-House Politician*

Tatehiko NOGUCHI

**Keywords:** Fielding, Don Quixote, coffee-house, politician, election

As for the time when *Don Quixote in England* was staged on the fifth day of April in 1734 at the Little Theatre, Haymarket in London, it may be called the turning point when Henry Fielding changed his political support by dedicating his drama to the Earl of Chesterfield, having been rudely dismissed from Robert Walpole's government. The reason why the drama was so delayed is that its draft which might be inspired and sketched out, when Fielding stayed at the University of Leyden, not only by the sights of many windmills in Holland but also his literary sentiment caused by one of his favorite authors, Miguel de Cervantes. It is well known that its manuscript done in the late summer in 1729 not in Holland but in England after his returning home was presented but refused by such then leading London-theatre managers as Colley Cibber and Robert Wilks in the fall of

1729. It was after four years and a half after having being rejected that *Don Quixote in England* was performed on the stage for the first time. It is not to be lightly disregarded that its time span is not so short, compared with Fielding's theatrical career of seven years and a half. All I shall attempt in this paper is to prove why Fielding managed to take *Don Quixote in England* to the Haymarket, never giving up its manuscript, and what quickened his interest in the coming English election.

One of the early dramatic works of Fielding, *Rape upon Rape: or The Justice Caught in His Own Trap*, was performed at the Haymarket on the twenty-third day of June in 1730. According to a chronological research on Fielding's dramatic career, *Rape upon Rape* may be supposed to be drafted out at almost the same time as that of *Don Quixote in England*. By the coincidence between the time of Fielding's scenario writing of both works, it may be conjectured that both dramas focused on the English rotten elections during Walpole's regime. It is in *Rape upon Rape*, staged in June 1730, that we can trace the first satiric innuendo against Walpole since Fielding returned from Holland. To be more specific, *Rape upon Rape* actually is based upon a contemporary scandal; Colonel Francis Charteris who appears in the works of such literary men as Alexander Pope and the Scriblerians as sensual and infamous, raped his maidservant. Having been jailed at Newgate, however, Charteris was set free after getting the King's pardon, because he was so close to Walpole, the prime minister. Thus *The Rape upon Rape* was renamed as *The Coffee-House Politician* at the end of November 1730, and under the new title it was revived at Lincoln's Inn Fields on the fourth day of the following month.

As the theatrical names suggest, it can be conjectured that both works set out to satirize an English rotten borough by making Spanish aliens emerge into England or a judge who is a guardian of the English judicial system, is ironically accused as a rapist, however both dramatic works were staged separately on a time scheme.